

『看聞日記』における病と死（４）

八 木 聖 弥

京都府立医科大学医学部医学科 人文・社会科学教室

前回に引き続き、貞成親王の周辺人物の病と死を取り上げたい。

（31）足利義量

応永 31 年（1424）正月早々、将軍・義量が病気になる。10 日条に「将軍自二日違例。庖瘡云々。仍堦飯無出座云々。此間此病流布。諸人病悩云々」と記す。当時流行の病気ということで、さして心配はなかった。ところが、翌・応永 32 年（1425）2 月になると義量は急死する。まず 27 日条に「将軍他界之由風聞。実説不審」としたうえで、28 日条には、

参議右中将義量 将軍他界実事也。昨夕云々。為天下驚歎。両三年内損。此間興盛種々被尽祈療。然而無其驗遂被墮命。当年十九歳也。尤可惜々々。室町殿於今無一子、将軍人体忽欠闕如。天下惣別驚入者也。茶毘明日於等持院可有沙汰云々。御台 母儀 不堪悲歎。存命不定云々。公家武家俗侶馳参、都鄙騒動也。当年相当三合。此歳天下必有凶事。自往昔度々例天下重事不可勝計。仍自旧年諸門跡御祈祷事被申云々。然而無其驗歟。既二宮御事、将軍連続天下又大乱風旁呈凶事了。

後小松天皇の皇子で、称光天皇の弟であった小川宮がわずか 22 歳で死去したのが 2 月 16 日のことであった。天皇もまた病弱である。その直後、将軍家も後嗣を失うのである。さらに、応永 31 年（1424）8 月 24 日には義持の母親も他界していた。まさに「天下惣別驚入者也」である。

（32）香雲菴主

この前後、貞成親王の身边でも病者や死者が多く出ている。応永 31 年（1424）

2月14日条には「山田坊主老病増気大略待時体云々。不便也。遺跡可相続無人体」とあるのに続いて、16日条には「山田 香雲菴主申剋円寂 七十二歳。不便哀傷不少。故萩原殿侍女也。旧勞之間、殊以不便也。遺跡相続無其人。毎事廓御方ニ被申置之間、彼局相計没後事法安寺松林菴 玄忠 申付云々」とみえる。大光明寺の塔頭・香雲菴の主が亡くなった。相続する人はいなかったが、廓御方の計らいで事なきを得た。「故萩原殿」とは、花園院の皇子・直仁親王のこと。崇光院の東宮になったが、院とともに廃せられた。栄仁親王も一時、萩原殿に移住したことがある（『椿葉記』）。応永5年（1398）5月に死去した。

（33）鳴滝殿

応永31年（1424）5月3日条には「自鳴滝殿御歌合五卷賜之。方丈自旧冬御脚氣以外之間、老病無憑之由奉」とあり、28日条に「祐誉僧都以状告申、鳴滝殿方丈 萩原殿前坊宮、昨日申時御円寂云々。自去年中風脚氣。此間増気遂以御逝去。驚歎不少。六十歳云々。今月之始以御書老病無憑之間、心細之由奉之。歌合等賜之。其御文余波也。哀動不少。御沙弥御所 十四歳 御入室以後七年也。御相続不可有予儀歟」と記す。鳴滝殿は前記・萩原殿の宮であるが、中風脚氣で死去したという。香雲菴主と同様、貞成親王とは近い人であった。相続については、14歳の沙弥が候補に挙がっているが、なお決定していない。続く6月8日条に「故方丈為菩提料所敷地一所 二千余疋所云々、徳光院有御寄附。其外御領等御沙弥御所御相続云々」とあり、このころには決まっていたようである。同月23日条に「鳴滝殿へ御茶子分 二百疋 進之。故方丈御訪御沙弥御所へ表微意了」と、貞成親王も弔意を表している。なお、応永32年（1425）5月19日条にみえる「鳴滝殿歸寺。数日御座。脚氣本復無為御帰珍重也」という「鳴滝殿」は別人であろう。

（34）坂本智恩寺殿

5月15日条には「只今聞、坂本智恩寺殿 崇光院皇女。御母治部卿。去十三日御円寂云々。今月自四日御違例。中風之由医師申云々。尤驚入者也」とある。応永27年（1420）正月に死去した「坂本智恩院殿 故法皇宮」（2月27日条）の跡を受けて寺主となった女性であろう。ともに崇光院の皇女である。中風が死因であると記していることから、相当の年齢であろうが、詳細は不明である。

(35) 大光明寺長老

8月18日条には「室町殿大光明寺入御。点心齋食心静御座。（中略）寺長老自昨日以外風氣也」、20日条にも「寺長老風氣以外也。世間病云々」と記す。大光明寺は貞成親王と縁の深い寺であった。

(36) 円光院堯範法印

9月24日条には「円光院堯範法印病氣以外云々」とあり、10月2日条には「円光院堯範法印昨日円寂云々。就比地御祈事此間まで申通、殊以催哀傷。故典侍禪尼余波之間、旁以哀動不少。遺跡附第無其人体云々。比地御祈第三年以後可返進之由申置云々。又聞、親平朝臣此間死去云々。源宰相弟子也。音曲者弥無人為朝無念也」と書く。円光院堯範法印は勾当局の弟であった。勾当局はのちに典侍禪尼と称し、応永31年（1424）8月28日に亡くなっている。その1年余り後に弟も死去したのである。親平朝臣は詳細不明だが、楽人であろう。

(37) 用健

くだって、永享3年（1431）3月には、貞成親王の異母弟・用健が死去する。1日条に、

用健申刻円寂 五十六 也。病体雖存内聊被取直之間、近日事不存寄迷惑哀傷無極。出世事遂以無其儀之条無念也。連枝於于今椎野方丈許也。落力了。雲峯和尚每事被執沙汰云々。

用健は周乾蔵主などともいい、大光明寺の塔頭・大通院の開基である。すでに2月29日の段階で「用健病氣難儀之間、大通院被退了」という状態であった。用健の死去により、貞成親王の兄弟は「椎野方丈」だけとなった。応永30年（1423）9月に死去した前寺主の跡を受けて入った松崖（洪蔭）のことである。なお、4月7日条には「雲峯和尚参来。用健遺物不動像三幅 金加羅、勢多加。仲安筆。献之。用健秘蔵持尊也。不兼感得機縁之至。且催哀動者也」とあり、遺品の不動明王三尊画像を得ている。

その後、公家・武家を問わず、死亡記事が頻出する。7月23日条に「奉行清和泉守病氣以外云々。而去廿日死去之由定直申。不便無極。此御所事無等閑申沙汰之間落力了。定直如親昵相憑殊落力之由申。旁不便々々」とあり、同月27日

条には「室町殿之姫君 三歳。母御台。一昨日夭亡云々。今暁大方殿 勝定院後室。他界。旁以驚入者也。御台御気色不快之間、旁被落力者歟。不便々々」と伝える。

(38) 正親町三条実雅の妹

永享4年(1432)に入ると、2月20日条に「三条中将妹 室町殿祇候上様妹。病邪気付狐以外狂気云々」という。「三条中将」は正親町三条実雅のこと。実雅には妹が二人おり、二人とも義教の妾であった。上様は上の妹・伊子で、ここでは下の妹のことである。狂気の振る舞いをする、多くは狐憑きと思われた。永享8年(1436)9月2日条にも「上臈 上様御妹 可被参之处、俄邪気更発之間不参」とあり、邪気を起こしたことがわかる。4月12日条には「御喝食令灸治。ぜんそくの療治也」とある。

(39) 貞常親王

同年4月25日条には「若宮聊有違例之気。若不浄負歟」と記す。続いて30日条には「若宮違例隔日発。大略瘡病歟。今日ハ不発」という。若宮(貞常親王)もまた、例の瘡病に侵されたようである。5月2日条にも「若宮自参宮之留守被違例。若不浄負歟。而隔日発之間瘡病歟。何様にも可尋医師之間、御乳人入江殿ニ申間、則医師中務大輔頼豊被喚進。対面腹病之由申可進良薬云々。故兼康朝臣子息也」という。丹波頼豊の診断によると、腹病とのことであるが、3日条に「若宮又発。所詮瘡病也。医師頼豊良薬二種進之」といい、貞成親王はあくまでも瘡病であると考えていた。一方で5月17日条に「若宮瘡病未落。木幡浄妙寺僧一和尚 政雅喚参令加持。晚聊発」とあるように、加持祈祷も忘れなかった。18日条にも「政雅参又加持申」といい、19日条に「政雅参加持申。庭宰相出京。大嶋事催促。広橋へ遣医師頼豊参。若宮対面。自昨日聊減気也。腹病発云々。可有灸治之由申」と、頼豊は腹病にこだわった。21日条にも「政雅参加持申」という。その後、まもなく完治したのであろう。記事は続かない。医師の診断が必ずしも絶対ではなかった。

なお永享7年(1435)4月20日条に「若宮自夜有御違例。昌耆田向へ来。折節為悦喚。御対面御虫腹之由申。非殊御事之由申」とみえる。大事には至らなかったようである。

くだって嘉吉3年（1443）3月29日条に「此間若宮御違例也。御加持之事、住心院令申」という。続いて4月1日条に「住心院手替大弐僧都参。若宮御加持申。今日ハ御取直。聊能御事珍重也」、2日条に「若宮御加持式部僧都参」、25日条に「大弐僧都参。若宮御加持申」と、加持が行われた。病名は明らかではない。

同年5月8日条に「若宮御口中有違例。頼豊朝臣参。進良薬」といい、今度は口の中の異常を訴えた。9日条にも「若宮御方祇候。御口熱未快。頼豊朝臣参。昨日よりハ聊能様ニ御云々」といい、その後記事はみえないから、まもなく回復したのであろう。

同年12月1日条に「若宮自今朝御事被損。仰天茂成朝臣召参。内裏女中面々参。被見申。聊御邪気歟。絶入之様ニ令発給。吐気痢下連々也。聖護院へ御加持之人可被召進之由令申。及晩五智院僧正参。御加持申。聊取直様也」とある。邪気かと疑うほど、混乱していたようである。2日条に「若宮同御式也。兵部卿、清阿可被召之由申。則参。見申進良薬。此間瘡病ニ如此病悩云々。五智院参御加持申」と述べ、医師・清阿は瘡病に似た症状であるという。3日条に「五智院参御加持申。今日まで三ヶ日申。今日ハ能御事之間、御加持効験珍重也」と、加持の効果を喜んだが、「夜若宮又有御発。能御事之处計会也」と、決して治癒したわけではなかった。

（40）日野秀光

永享4年（1432）6月2日条に「日野中納言 執権秀光卿昨日他界云々。自去年病悩遂以墮命不便々々。無一子定可有猶子歟。若山庄以下家領共誰人可相続哉。日野宗領 一品禅門若山庄如元可被返付歟不審」とある。秀光は院の執権を勤めていたが、32歳の若さで亡くなった。子どもがいなかったので、だれが相続するのか憂慮している。4日条に「秀光卿遺跡ハ広橋中納言子息 八歳。嫡子也。為猶子。若山庄以下賜安堵。室町殿計御沙汰云々。能登国若山庄者大庄日野宗領 代々 管領之地也。一品禅門 有光卿 背御音被召放畢。一品禅門舎弟 秀光卿ニ賜之。畠山修理大夫入道 能登守護、千二百貫ニ受之。而守護不入之地之由被聞食、召可直務之由、此間被成安堵三ヶ日之中、秀光卿逝去了。無一子之間広息被成猶子云々」と述べ、広橋兼郷の子息が相続することとなった。

(41) 斯波義淳の男子

同年 6 月 14 日条には「管領子息 民部大輔 他界云々。数日病氣無憑之由風聞。器用之人云々。不便々々。大性院比丘尼通首座 持経姉、一昨日円寂云々。虚勞数日病氣存内也。去々年参。殊不便。持経周章歟」とみえる。時の管領は斯波義淳（よしあつ）。息子に先立たれた義淳は、永享 5 年（1433）11 月、重病に罹り、11 月 30 日条に「前管領武衛逝去之由、只今風聞驚入。実説不審。舍弟此間病氣之由聞。若其事歟」とあるのに続いて、12 月 2 日条に「前管領武衛今晚逝去云々。尤不便。為天下驚入者也」というように、まもなく死去する。すでに息子を亡くしていたこともあって、家督は義教の命により弟が相続することになった。同月 3 日条に「武衛遺跡相続事、武衛舍弟相国寺僧 鄂隠和尚弟子 給安堵。則曩頭名字義郷云々」とある。弟は相国寺の瑞鳳蔵主で、還俗して義郷と名乗った。持経は慈光寺家で、父・師仲同様、後小松院に近侍した。翌年、持経は妻も亡くしている（永享 5 年<1433>5 月 14 日条）。

(42) 畠山満慶

永享 4 年（1432）6 月 28 日条には「昨日畠山修理大夫入道 前管領舍弟能登守護 逝去。是長病也。前管領被落力云々。今月中公家武家大名四五人卒驚入」とする。前管領は畠山満家。足利義持死後、彼が画策して石清水八幡宮の神前で籤を行い、義円（義宣。のちの義教）を後嗣にした。その弟は満慶（みつのり）。満家と同年の生まれなので、あるいは双生児か。能登守護を世襲する修理大夫家の初代である。なお、満家は永享 5 年（1433）9 月 19 日条に「今朝前管領畠山死去。持病虫腹更発俄死去云々。昨日まで申通地下事、以芳言可然意見被申处落力了。凡宿勞之間天下事以諫言被申沙汰。就惣別驚歎也」というように、持病の「虫腹」が原因で死去した。過激な義教を統御しながら政治の安定を図った。

文末にあるとおり、次々と知人が亡くなっていく。貞成親王、この年、61 歳。瘡病や脚気に悩まされていたから、けっして他人事ではなかった。8 月 26 日条にも「赤松大河内公方御共申播州へ下向。於彼所死去云々。自兼病氣。然而押而罷下死云々。佐土余部代官也。不便々々。遺跡不可相替歟。但実説不審」とみえる。ただし、頭書に「後聞。大河内死事無其儀。倒虚説不可説々々。病条ハ勿論也」とあるから、誤報であった。

(43) 三日病・痢病

永享4年(1432)8月30日条には「天下三日病、痢病等流普云々。諸人病悩。春日病了則本復。御乳人又病悩大事也」という。衛生状況の悪さから、ひとたび蔓延するとなかなか抑止しようがなかったのであろう。9月11日条に「広橋子息死去云々。大理悲歎不便々々。若山庄相続神慮不可叶事歟。今曉山田坊主円寂云々。故廓御方遺跡相続菴主也。不便々々」と、身近な人の死を悼むとともに、その相続を気にするのは、貞成親王の習性でもあった。

(44) 田向経兼

永享5年(1433)2月14日条に「田向宰相此両三日違例。以外之間、医師昌耆喚来云々。腹病興盛之由申云々」という。田向宰相は田向経兼のこと。伏見宮の近習である。久しぶりに昌耆の名がみえる。15日条にも「田向今朝猶以外也。大略無憑之由申。不便無極。(中略)昌耆良薬令服。聊取延体也云々。本復令念願」と、かなり深刻な状態であったが、昌耆の良薬でやや持ち直したらしい。20日条にも「田向事二入御医師昌耆来。腹病聊有減気。雖然心苦体也。不可有由断之由申云々。本復念願無極」、22日条に「田向祈祷大般若經転読所劳聊能様也。大淵和尚 靈松院主。大光明寺前住。参来。対面。解毒丸 三百粒 持参。為悦。造花梅一枝 付花袋遣之」とある。例によって祈祷を行う一方、解毒丸なる薬を服用した。その後、4月朔日条に「田向前宰相参。病氣之後于今籠居。本復之間初参。不思議立直之条珍重無極。仍折紙一遣之」というから、奇跡的に回復したらしい。なお、このころ世間でも病気が多発していたらしく、2月16日条に「先日地震天下病悩。薬師如来衆生二相替病給云々。仍諸方薬師へ万人参之由風聞」というように、地震が原因で病気が流行したと考え、各地の薬師如来に参詣していた。

(45) 上臈局

同年2月17日条には、

自昨夕上様俄違例邪氣以外之間、御仰天驗者達被召集加持。聖護院五檀法事被申。大般若經百人転読御祈祷共馳走。言語道断御周章云々。驚入者也。狐付狂気也。凡御所中女房五人狐付邪氣病悩様々被祈祷云々。

ここでいう上様は将軍・義教の愛妾・上臈局のこと。正親町三条実雅の妹・伊子

(既出)。狂気の沙汰を演じ、やはり狐憑きとみなされた。姉妹とも狂気であった。早速、祈祷が行われる。女房たちも同様の有様であったという。上臈局は永享9年(1437)11月にも「邪氣」を起こし、天狗の仕業などとうわさされた(11月1・2・3・4・5日条)。折しも6日には室町殿に祇候する女中が密通するという事件が起こり、複数人が切腹させられている。貞成親王はこれらをみて「上様御絶入も天狗所行也。御所中不思議事共繁多云々。千本殿比丘尼伊勢参宮下向。為狂気御所へ参。種々事共託宣。所詮悪將軍之由申云々。不可思議事風聞。莫言々々」と書き残している。伊勢の託宣によれば、すべては將軍・義教の悪徳ゆえというのであった。貞成親王も複雑な心境であったに違いない。なお、上臈局は永享10年(1438)12月にも「邪氣」を起こしている(12月13・14日条)。嘉吉元年(1441)2月にも同様の出来事があった(2月16日条)。

(46) 子取り

同年4月4日条には「此間洛中洛外有子取者。於諸方取之。誰人之所為とも不知。男女房僧聖等取之。或子を取返、或被打殺云々。悪瘡薬之料二取云々」とある。当時流行した子取りであるが、斉藤研一氏によれば、人間の臓器には神秘的な霊力が宿っており、それを自己の中に取り込むことによって不治の病を治すことができる信じられていたという。そして、死者の臓器よりも生者のそのほうが効能があり、さらに生命力に満ち溢れた子どもの臓器が尊ばれ、そのため子どもが誘拐されたのである(『子どもの中世史』2003年、吉川弘文館)。少なくとも平安時代から臓器を薬用とする風習がみられたが、なぜこの時期にとりわけ子どもが対象となったのであろうか。おそらく動乱での殺戮を間近にして人の生あるいは死に対して鈍感になっていたこと、逆に病死者の頻発を目の当たりにしていかなる手段を用いても延命を図りたいという欲望が強く、臓器への需要が高くなっていたこと、臓器を購買するだけの経済力があつたこと、などが考えられるであろう。すなわち自己の生と他者の生とを均質なものとしてみない心性が認められるのであり、倫理観の欠如が子どもの人身売買へと走らせたのではあるまいか。

(47) 後花園天皇

同年5月6日条には、後花園天皇の病気を伝える。

内裏様自廿八日聊有御惱事 御喉腫 室町殿医師 三位 被召素進 良薬被聞食。

自二日三日次第御本復云々。御在位之後聊も無御惱。而初而御惱之間驚申
処、臆本復御珍重也。御養性之間、未無御沐浴之間、無御拜之儀云々。

喉が腫れたようで、正長元年(1428)7月に即位して以来、はじめての病気であるという。義教の計らいで坂胤能が派遣され、やがて本復した。

天皇は比較的健康であつたが、それでも永享6年(1434)8月以降、「腹病」に罹っている。9月1日条(頭書)に「禁裏自去月御腹御違例云々。三位房良薬献。同篇御事云々」とあるのをはじめとして、6日条に「内裏 御所様御腹次第二御減気云々。珍重也」、7日条に「源宰相為御使内裏参。御腹事申入。雖御減気未さハさハとも無御座云々」、12日条に「勾当有状。内裏御腹同篇。聊猶御増気之様令見御云々。驚入。三位房良薬更無其驗云々。若神慮之崇敷如何。可有御祈祷者哉。自来十七日可被行御修法云々。早速御本復令念願」というように、一進一退の状態であつた。

一方で例によってさかんに祈祷が行われる。14日条に「自内裏御百首又三卷被出。御腹猶同篇云々。医師音知容又参云々。内裏御祈自今日法安寺申付」、17日条に「源宰相八幡参。内裏為御祈参詣。予御香宮参。御千度同御祈申。御千度人数、予、前宰相、行豊朝臣、経秀、行資、基祐、承泉等也。於禁中自今日被行御修法。阿闍梨実相院僧正云々。御腹聊御減気云々。珍重也」、19日条に「内裏御腹之式猶未同体御座。先ハ能御分也云々。御祈事諸門跡被申。来廿一日泰山府君被行。御修法薬師不動准大法云々」、25日条に「早旦御香宮参令御百度。為禁裏御祈也。蔵光天神参。同御祈申。早々有御本復者連歌百韻可奉納之由立願畢。源宰相出京。御腹猶同体之由奉之間、為御使禁裏参。(中略)源宰相帰参。御腹之式只同宿。内外之御祈、種々秘薬等雖被聞食無其驗。如何様御事哉驚入」、さらに10月1日条に「早旦御香宮参令御百度。今日自内裏於御香宮宝前為御祈大般若經被転読。法安寺申付。経衆泉涌寺僧一兩人、即成院聖道兩三人、彼是八人也。是踐祚之時御願被果遂也。今度御不予旁御祈也。早々有御本復。重大般若經可被転読御願也。法安寺慇懃申沙汰神妙也。供料自内裏被出 三百疋。昨日於禁裏御修法被始行。阿闍梨 醍醐 地蔵院僧正云々」と、大掛かりな祈祷が企画された。そして、2日条に「勾当遣状。願書案進之。伊勢御代官社参。神馬。八幡真読大般若經。大坂御百度御神楽等。早速有御本復者可果遂之由捧願書了。其由委細令申。

而有勅報。自昨日聊小減之由被仰下。殊以目出承悦。併神慮也。珍重々々」と、祈祷の甲斐あってか、天皇は回復の兆しがみえはじめた。

続いて4日条には「源宰相出京。自内裏御本尊御用之由被仰下之間、大師御筆百体之不動一幅進之。勾当ニ付遣。御用以後可被返下之由令申。此不動邪気等有其驗。秘藏之本尊也」というように、天皇からの申し出により、貞成親王は秘藏の不動画像を貸与するのである。この月、天皇はようやくもとの状態に戻りだし、5日条に「御腹次第御減気之分也。珍重々々」、21日条に「御腹も次第御本復云々。旁珍重々々」、22日条に「御腹次第御減気云々。珍重々々」といった文字がみえる。12月3日条に「禁裏御腹さハさハと御本復之由奉之間、珍重之由献状」といって、半年近くにわたる腹病が治まった。

永享9年(1437)6月13日条に「宮御方自夜御霍乱。茂成朝臣参。御脈無殊云々。良薬献之」と、霍乱を起こしたが、大事には至らなかった。

天皇は永享10年(1438)6月にも体調を崩す。4日条に「内裏様聊御違例之由、御乳人告申。驚入」とあり、5日条に「禁裏御式同篇云々。今朝室町殿へ被申。清阿 医師被召進云々。以源中納言申入。勾当申次。賢固御風氣之由清阿申。今朝有御醒。又無御発之様ニ可有御養性之由申。進良薬云々」とあるから、風気であった。將軍から幕府召し抱えの御用医師・清阿が派遣されている。6日条には「禁裏次第御減気云々。珍重也(中略)照善良薬持参」といい、すでに回復しはじめていることがわかる。7日条には「内裏より地藏絵一合 六巻 給。室町殿御絵云々。此間御不予本復御養性之間、御つれづれなぐさめニ絵有御尋。是へも奉。雖相尋未出来、室町殿へ被申間被進云々」という。養生とはいうものの、暇をもてあましていたらしい。

さらに嘉吉元年(1441)3月、天皇は疱瘡に罹っている。17日条に「禁裏一兩日聊御蒙気云々。若流普事敷。医師参進良薬云々」という。直前の14日条に宝厳院の方丈が疱瘡を患ったことが記され、「天下流布。万人病悩」といっているから、もしや流行の病気ではないかと疑っているのである。19日条には「禁裏猶六借御事云々。此病気敷之由、医師申云々」と述べ、かなり症状が重かったことをうかがわせる。21日条に「禁裏疱瘡已出現云々。驚入之由申入。自今夕於内裏孔雀経法被行」とあり、確かに疱瘡であった。しかし、25日条には「禁裏聊今日ハ能様ニ令見御云々。珍重也」とあるから、すでに回復しはじめている。

この時期、今出川教季、伏見宮の女中、茂成朝臣の娘や喝食、竹園など、多くの人々が痲瘡に悩まされていたことが『看聞日記』に散見できる。やがて28日条には「以重賢内裏へ申入。御悩も御減氣之間、旁珍重之由申入」とあるから、ほぼ回復したのであろう。

同年6月24日条には「医師音知客参。宮御方不例之間喚。虚氣之由申。良薬仰付」とある。

（48）足利義満の娘

さて、永享5年（1433）に戻ると、閏7月13日条に足利義満の娘を伝える。

崇賢門院御跡南御所 鹿苑院殿御女、今朝円寂。自一日痢病以外火急遂被墮命云々。故鹿苑院殊寵愛御娘也。女院遺跡相統黒尼也。室町殿姫君為御弟子而去年夭亡。仍御氣色不快云々。

弟子であった義満の娘が死去してから、体調がすぐれなかったという。

（49）ちよちよ

同年10月22日条には、貞成親王の娘・ちよちよが病気になったという。

医師頼豊参。姫宮 四歳ちよちよ、此間違例之間喚之。風氣食之由申。以次対面初令対面。此間口熱興盛齒立針神虚之由申。良薬可調進之由申。

貞成親王は永享2年（1430）8月、息女を一人亡くしている。同月10日条に「田向御座姫宮 予息女。三歳。長資朝臣養君、夜前夭亡。痢病両三日之間、火急之儀不便無極。養父養母悲歎忘是非云々」という。養女に出したとはいえ、そのときのことが脳裏をよぎったであろう。なお、ちよちよは、その後、将軍の計らいで岡殿に入室している（永享6年<1434>11月27日条）。

（50）御香宮の巫女

永享5年（1433）12月16日条に「御香宮巫女一去十三日死。仙洞へ参。於右衛門督局飲酒。御中陰之間依不浄負其咎忽死云々。神慮可恐々々」という。服喪期間中に飲酒したため「不浄負」により急死したという。

(51) 土岐與康

同年 12 月 25 日条に「土岐與康坂本陣より帰。於途中病死云々。武勇名将也。不便々々」という。土岐與康は土岐氏の一族であろうが、詳細不明。

(52) 二条北政所

永享 6 年 (1434) 2 月 7 日条に「二条北政所此間逝去云々。正月産生男子、無為之处産後病惱遂不覺云々。依之参宮被留。折節も無念事也。周章云々」とある。二条北政所は産後の経過が悪く、死去したという。しかし、同日条の頭書に「後聞、北政所逝去事虚説也。如然雖披露被取直云々。依邪氣如此先無為也。巷説比興々々」というから、誤報であつた。

(53) 満濟准后

同年 3 月 18 日条には、満濟准后の病氣が伝えられる。「三宝院准后此間病氣以外難儀云々」。満濟准后は將軍・義満の猶子となり、寵愛を受けた。弟子の宝池院義賢は、義満の弟・義詮の子息であつた。応永 2 年 (1395) に三宝院門主、醍醐寺座主となる。義持からも厚い信任を得た。さらに管領・畠山満家らと謀り、青蓮院・義円 (義教) を將軍に就けたことも有名である。そのため義教から絶大な信頼を受け、後花園天皇の擁立にも手腕を発揮している。一方で守護大名との関係もよく、「黒衣の宰相」と呼ばれた。貞成親王との親交も深い。19 日条には「早朝源宰相、三宝院 醍醐 遣使。病氣事訪申。則帰参。自八日違例虫腹興盛云々。聊能様也。御使殊恐悦之由被申。西南院法院申次云々。昨日已逝去之由風聞。虚説不可説也」と記し、早速見舞いの使者を遣わしている。すでに死去したとの情報もあつたが、これは誤報であつた。4 月 14 日条には「源宰相、三宝院為使罷向。病氣聊取直云々。諸人罷向之由。聞、室町殿も度々入御云々。仍遣之。水本々々申次。病氣昨今聊能様也。然而同篇也。度々預御使殊恐悦之由被返事」とあり、さほど心配ない様子であつた。一安心である。

ところが、永享 7 年 (1435) 5 月、病氣が再発する。5 月 21 日条に「三宝院准后病氣再発危急云々。一昨日室町殿渡御。諸人鼓操云々」という。すでに危篤状態であつたらしい。続く 28 日条に「三宝院已及難儀被出本坊 三宝院 云々」とみえる。そして、6 月 13 日条に、

三宝院准后今朝入滅云々。此両三年病氣。今度瘵病興盛墮命。天下義者也。公方殊御周章云々。連々醍醐渡御御懇切訪給云々。室町殿自今日五檀法被始云々。

というように、ついにこの日、死去するのである。58 歳。貞成親王は満濟准后を評して「天下義者」といった。私利私欲におぼれず、公平な立場で諸方の信頼を得ていたという意味である。将軍・義教も悲歎にくれていたという（6月15日条）。

（54）豊原郷秋

永享6年（1434）5月6日条に「郷秋病氣水腫云々」とある。郷秋は伏見宮の近習であろう。

（55）上林坊

同年12月1日条に「山徒上林坊自最初降参御方随分者也。一兩日以前腫物病死云々。若神慮歟不思議也。討手ニ山門雖被向手者共罷向。其身於京都死去云々。為山徒降参。違神慮歟」とみえる。永享5年（1433）7月、延暦寺衆徒は宝播院造営の不正を挙げて幕府に強訴した。ところが、逆に幕府に攻められ、12月に降参する。その後も幕府と延暦寺との対立は続き、多くの死者を出している。上記はこうした事件の中での話であり、「神慮」の文字がみえるのもそのためであろう。

（55）姫宮御乳人

永享7年（1435）7月には、姫宮御乳人の蘇生が語られる。10日条に、
内裏姫宮御乳人相替新参。自入江殿被進。以前御乳人、十四五之比、病悩十五度までよみ帰。熊野人之間、那智滝ニうたれなどさまざま祈精して本復。于今無為云々。此事自然物語ニ白状申間、東御方、公方ニて被物語申間、如此之物被召置不可然之由有御沙汰云々。仍自入江殿被召替新参候。不思議之間聊記之。

という。御乳人は病気を患いながら、15度までも蘇生したという。彼女が熊野の人であるという点に注意すべきであろう。熊野三山（新宮・本宮・那智）に対す

る信仰は、平安時代以降、神仏習合思想によって阿弥陀浄土などとみなされ、多くの参詣者を集めた。南北朝時代に成立したと思われる『熊野の本地』には、天竺摩迦陀国の善財王の後・御翠殿が他の後の嫉妬にあい殺害される。ところが、御翠殿は蘇って熊野の神になったという。すなわち女性の蘇りがテーマになっているわけで、御乳人の蘇生譚もこうした背景があるとみなされる。

(56) 真乗寺沙弥

同年 9 月、真乗寺沙弥が狂気となった。10 日条に、

夜俄御沙弥違例。事之体狂気也。邪気歟之間法安寺巫女等喚、令加持。以外之間仰天無極。暫時醒了又発。神子伊勢御崇之由申。両度発之後為本性。不可思議也。

という。法安寺の巫女がいうには、伊勢の祟りであるとのことだが、前後の記事からは原因が明らかでない。11 日条にも「御沙弥今夜も聊発。魘醒了」、13 日条に「御沙弥不発無為。珍重也」、23 日条に「御沙弥夜前邪気以外再発。今朝ハ本性云々」というように、一進一退であったが、25 日条には「御沙弥其後不発本復之由申。珍重也」とあるから、一段落したらしい。

(57) 春日殿・天王寺比丘尼

同年 8 月 12 日条に「春日、此間瘡病発」とあり、10 月 1 日条に「春日殿帰参。自去年九月入江殿ニ祇候。瘡病不落之間、為落日在京。此間本復云々。仍帰参」と、春日殿の病気を伝える。春日殿は御乳人の一人。永享 8 年 (1436) 閏 5 月 29 日条には「天王寺御比丘尼瘡病及数日。木幡宣光坊召令落」とあり、天王寺の比丘尼も瘡病に罹ったことを伝えるが、こちらは木幡宣光坊によって治まったという。おそらく加持を行ったのであろう。

(58) 大工源内

永享 8 年 (1436) 4 月 26 日条に「大工源内自去比病氣。今日墮命云々。不便無極。自去年殊致奉公之处惜無念也」という。源内は前年、一条東洞院の新御所造営に当たった人物である。このとき「幸運之至」と喜んでいた (8 月 9 日条)。

(未完)